

広陵町埋蔵文化財調査概報 5

平尾金池遺跡

発掘調査概報

1993

広陵町教育委員会

例　　言

1. 本書は、奈良県北葛城郡広陵町大字平尾249、250、251の一部、252-1、256、257、265-2に所在する平尾金池遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、晃和開発株式会社の委託を受け、広陵町教育委員会が実施した。現地調査は、平成4年9月21日に開始し、10月31日に終了した。実勤日数は26日間である。事業対象面積は2,290.55m²、調査面積は201m²である。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体	広陵町教育委員会	教育長	上村恭三
調査指導	奈良県教育委員会		
調査担当者	広陵町教育委員会	社会教育課 技師	井上義光
調査補助員	浅尾和宏、蒲生玲子、高井美智子、多田慶子、藤村孝子		
調査作業員	松井正一、藤井清治、北橋 昇、藤山茂一郎、井岡 武、植村光夫 久保喜代一		
調査事務局	広陵町教育委員会	社会教育課 課長	森川 勇、主事 山下善敏 派遣主事 荒木啓司、嘱託 高橋浩樹
4. 本書をまとめるにあたり、下記の機関並びに諸氏に種々の御協力を得た。ここに記して謝意を表する。

奈良県立橿原考古学研究所、広陵古文化会、会長　坂野平一郎
また、大字の方々にも貴重なご教示をいただいた。
5. 本書に使用した周辺遺跡図及び、周辺地形図は、昭和60年に広陵町が発行した1万分の1、2,500分の1の地図である。
6. 本書の執筆、編集は井上が行った。

目　　次

I. 契機と経過	1
II. 位置と環境	1
III. 調査の概要	3
1. 基本的層位	4
2. 遺構	6
3. 遺物	10
IV. 結語	13

I 契機と経過

広陵町大字平尾249、250、251の一部、252-1、256、257、265-2において発和開発株式会社（代表取締役 畠田良清）より宅地造成を目的とした埋蔵文化財発掘の届出書が提出された。当該地は1970年（昭和45年）に奈良県立橿原考古学研究所が実施した遺跡分布調査によって、土師器、須恵器片が採取され、『奈良県遺跡分布図』第2分冊の10-D-105にあたる。1988年（昭和63年）におこなった町内遺跡詳細分布調査でも広陵町遺跡地図の遺跡番号150の平尾金尾遺跡として再掲されている。開発予定地が周知の遺跡であることから宅地造成工事に先立ち発掘調査が必要となるため、奈良県教育委員会事務局文化財保存課の指導にもとづき、広陵町教育委員会が事業対象地を試掘調査した。

現地調査は、平成4年9月21日に開始、10月31日に終了した。実働日数は26日間を要した。

II 位置と環境

平尾金池遺跡は、南北7km、東西3kmに広がる馬見丘陵内部に位置する。丘陵は標高65～80m、盆地との比高20m前後で、数多くの小支丘と小谷で構成されている。地質学上、第三紀の終わりの鮮新世から第四紀の更新世（洪積世）にわたる時期の堆積層にあたる。

遺跡は、馬見丘陵の内部を北流する高田川と佐味田川によって形成された南北走向の主幹尾根から東へ派生する小支丘間にによって形成された掌状を呈する小谷に形成されている。

調査地点は、遺物散布範囲の北部、天照皇大神社を北側に後背する南斜面に位置する。現況地形は旧地形の上に盛土がなされ、緩斜面となっていたが本来は小字が示すとおり、天照皇大神社の南側から東西に細長く溜池があり、池堤を界して南側には東西に細長い畠、水田がつくられていたという。

さて、周辺に広がる遺跡であるが、詳細は他の報告書に譲り、ここでは平尾金池遺跡周辺の遺跡及び同時代の遺跡を概観する。

一般的に、馬見丘陵の東斜面に分布するいくつかの古墳を群ととらえ、「馬見古墳群」と総称されている。さらに、古墳の密集状態から丘陵東北麓、丘陵中央部、丘陵南端部の3グループに区分し、理解してきた。丘陵東北麓には、川合大塚山古墳を中心とする北群があり、中央部には巣山古墳、新木山古墳（2）、乙女山古墳を中心とする中央群、南端部には新山古墳（16）、築山古墳を中心とする南群が存在する。さらに、小規模な単位である安部山古墳群（8～14）、黒石古墳群（25～33）も一群として考えられている。^(註1)また、北群の川合大塚山古墳群を、丘陵から離れた立地状況（大和川、曾我川などの合流する低地の微高地）から東方2kmに所在する島ノ山古墳との立地的類似性を指摘する考え方も示されている。^(註2)南群についても新山古墳と築山古墳を同一



- | | | | |
|--------------|---------------|----------------|---------------|
| 1. 腹岐神社古墳 | 10. 安部山第 6 号墳 | 19. 新山西古墳 | 28. 黒石第 12 号墳 |
| 2. 新木山古墳 | 11. 安部山第 5 号墳 | 20. モエサシ第 2 号墳 | 29. 黒石山古墳 |
| 3. 石塚古墳 | 12. 安部山第 4 号墳 | 21. モエサシ第 1 号墳 | 30. 黒石第 9 号墳 |
| 4. 菊山古墳 | 13. 安部山第 7 号墳 | 22. エガミ田第 2 号墳 | 31. 黒石第 14 号墳 |
| 5. 皇子冢古墳 | 14. 安部山第 3 号墳 | 23. エガミ田第 1 号墳 | 32. 黒石第 8 号墳 |
| 6. 鴨山古墳 | 15. 夫婦池第 2 号墳 | 24. エガミ田第 3 号墳 | 33. 黒石第 5 号墳 |
| 7. 平尾金池遺跡 | 16. 新山古墳 | 25. 黒石第 10 号墓 | 34. 黒石第 6 号墳 |
| 8. 安部山第 1 号墳 | 17. 新山東第 2 号墳 | 26. 黒石第 11 号墳 | 35. 黒石第 4 号墳 |
| 9. 安部山第 2 号墳 | 18. 新山東第 1 号墳 | 27. 黒石第 13 号墳 | 36. 黒石東古墳 |

図1 平尾金池遺跡周辺遺跡

の古墳群とすることにも疑問が提出されている。^(註3)

馬見丘陵の調査も進み、従来の3グループでの古墳群として解釈するには矛盾が生じて来ている。さらに詳細な時代考証を行い、実体と相互関係を解明する時期にあると考えられる。

「延喜諸陵式」には旧広瀬郡に築かれた墓として高市皇子の三立岡墓、桓武天皇の生母の父高野乙繼の牧野墓、押坂彦人大兄皇子の成相墓があり、それぞれ東西6町・南北4町、東西3町・南北5町、東西15町・南北20町という広大な光城を持っていたと記されている。また、守戸があり、牧野墓には一煙、成相墓には5煙あったと記述されている。この中で唯一、文献に残る陵墓を考古学的に実証し得たのが、押坂彦人大兄皇子の成相墓と考えられる牧野古墳である。詳細は牧野古墳の調査報告書に譲る。

馬見丘陵内部では、主に古墳が周知されており、平尾金池遺跡のような住居跡が確認されることは極めて珍しい。これは、古代の集落跡が、位置的に現在の集落と重なっているためであると考えられる。ちなみに、平尾金池遺跡の南々東には、遺物散布地が3ヶ所程あり古墳時代の遺物が採集されているが、その実体は不明である。巣山古墳の北東部に広がる寺戸遺跡の調査も数次に亘り調査が行われている。^(註4) 奈良、平安時代の庄園開発の基地という性格付けがなされているが、最近の調査で古墳時代後期の堅穴式住居跡が発掘されている。^(註5) 大福寺の古文書に記される廣瀬寺と合せて寺戸遺跡の性格を再考する必要がある。^(註6)

馬見丘陵の既往の調査を含めて、丘陵の遺跡群を再評価する時期であると思われる。

註1. 泉森 皎「新山古墳群—広瀬南部特定土地区画整理事業地内の発掘調査概報ー」

広瀬町教育委員会 1981年

註2. 河上邦彦・松永博明・卜部行弘「史跡牧野古墳」広瀬町教育委員会 1987年

註3. 白石太一郎・前園実知雄「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県教育委員会 1974年

註4. 河上邦彦・泉 武「寺戸遺跡発掘調査概報」広瀬町教育委員会 1975年

註5. 稲原考古学研究所 寺沢 薫氏教示

註6. 秋山日出雄「箸尾満嶋弁才天瑞夢記抄」大福寺 1979年

III 調査の概要

調査は、北から南へ向け緩い斜面に第1トレントを設定し、事業地の南に東西方向に第2トレントを設定した。

第1トレントは、事業地の北西部に幅4m、長さ10mで設定した。現状地盤から約1.5m程の盛土がなされ、耕作土、地山ブロック混入土（近世盛土）を経て地山に至る。近世盛土は池堤の築堤に係わるものと思われる。築堤部の南には段々に形成された畠、水田の削平を受けていた。

第2トレンチは、事業地の南辺部に幅4m、長さ20mで設定し、住居跡の規模を確認するため第2トレンチの北側に幅4.5m、長さ18mで拡張した試掘坑を第3トレンチとした。

1. 基本的層位（図3）

基本的層位は、トレンチの西端で盛土、耕作土、床土、中世盛土である灰褐色粘質土層（5層）を経て地山に至る。トレンチ西端付近には、上部の溜池から南に延びる暗渠が設置されている。西侧の暗渠は、耕作土から掘り込まれ、標高56.8mで竹の導管が出土した。東側の暗渠は床土から掘り込まれ、暗渠底は標高56.55mとなる。トレンチ中央部では、灰褐色砂質土層（7層）、赤茶褐色粗砂質土層（8層）を経て茶灰褐色土層（SI-01埋土9層）に至る。トレンチ東端の層位は、耕作



図2 平尾金池遺跡調査位置図



図3 第2トレシチ北壁土層断面図

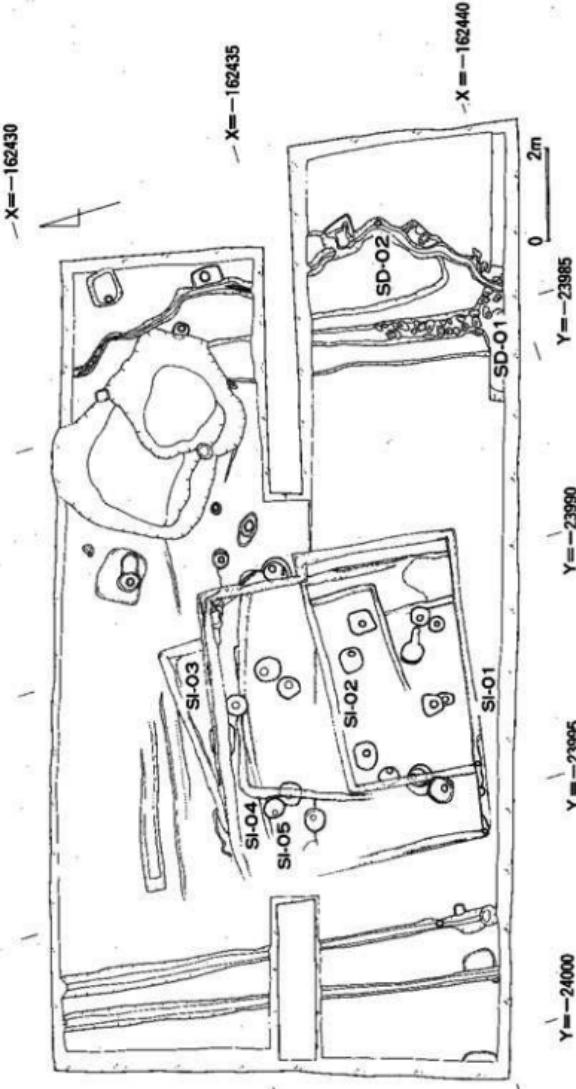


図4 第2・第3トレンチ遺構平面図

土、床土、灰褐色粘質土層（5層）、明灰褐色粘質土層（6層）、赤茶褐色粗砂質土層（8層）を経てSD-01の基盤層となる。

2. 遺構（図4）

第1トレンチでは明確な遺構は無く、図示していない。第2・3トレンチからは5棟分の住居跡及び溝等を検出した。

第2トレンチの東端から掘削を始めると黒灰色粘質土から多数の土器片が出土した。これが南北走する奈良時代前半の溝SD-01の埋土である。さらに東側には、蛇行しながら南へ流下する自然流路SD-02が存在する。

地形上、北部が高いため第3トレンチは、保存状態が良好であったが、トレンチの北東隅に長径4.6m、短径3.2mの梢円形を呈する擾乱孔が穿たれ、中央部に平安時代の素掘溝があり、西部では、溜池から南流する暗渠のため土壤の変化が引き起こされていた。

SI-01（図5）

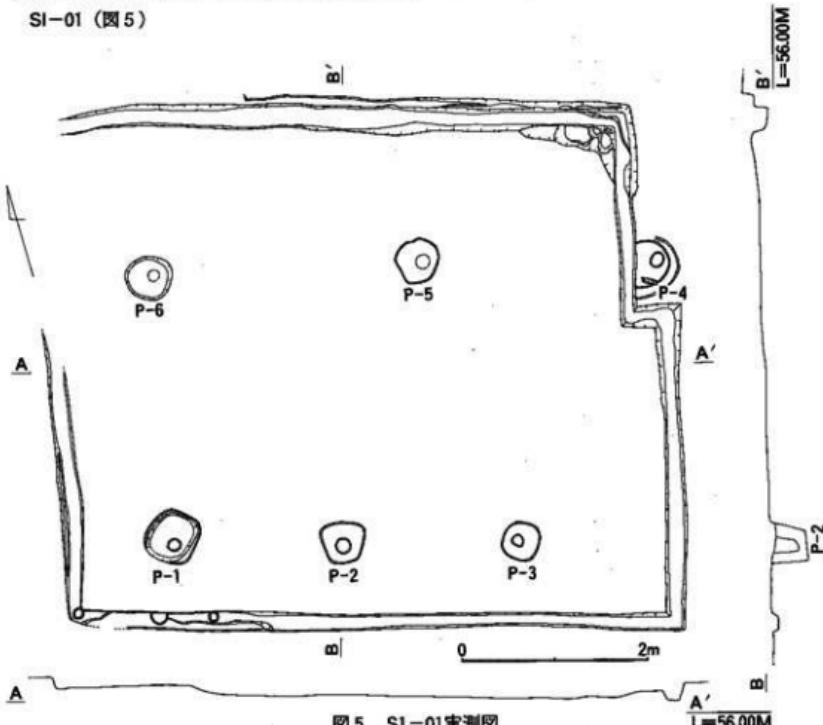


図5 SI-01実測図

トレンチ中央部で検出した堅穴式住居跡で平面プラン長方形で北東部が約50cm西に鉤手状に窪む。規模は6.62m×5.60mで北西部が搅乱のため削平されている以外は、壁周溝及び支柱穴を検出した。主軸はN-11°50' - Eにある。壁周溝は北辺で幅25~35cm、深さは北辺で約25cm程度残る。深さは平均20cm程度である。壁周溝と北壁の間には約5cmの段が設けられている。東、南では幅20~25cm程度で深さも10cm程度残るのみである。床面は標高56.20mであり、堅緻であった。カマド等の施設は未検出である。支柱と考えられる柱穴は6ヵ所検出した。柱穴の数値は次のとおりである。

P-1 (55cm×55cm 柱径14cm)、P-2 (55cm×45cm 柱径16cm)

P-3 (42cm×55cm 柱径14cm)、P-4 (55cm×60cm 柱径16cm)

P-5 (45cm×48cm 柱径18cm)、P-6 (50cm×45cm 柱径13cm)

北側の東西柱穴列と南側柱穴列での真々距離が異なり、南柱列はP-1~P-2~P-3で182cm、186cmに対しP-4~P-5~P-6で251cm、289cmと長く、従って桁行も南側で368cm、北側で540cmを計る。梁行は約290cmであるところから南から伸びる梁を北側の桁間で受けける形となる。

SI-02(図6)

SI-01の南で検出した堅穴式住居跡で北辺の壁周溝、東西辺の壁周溝の一部及び支柱穴2基を検出した。規模は東西475cm、壁周溝南辺が未検出のため不正確であるが周溝と支柱穴間で折り返して規模を復元すると南北490cmとなるが平面プランはほぼ方形と考えられる。主軸はN-11°30' - Eにある。

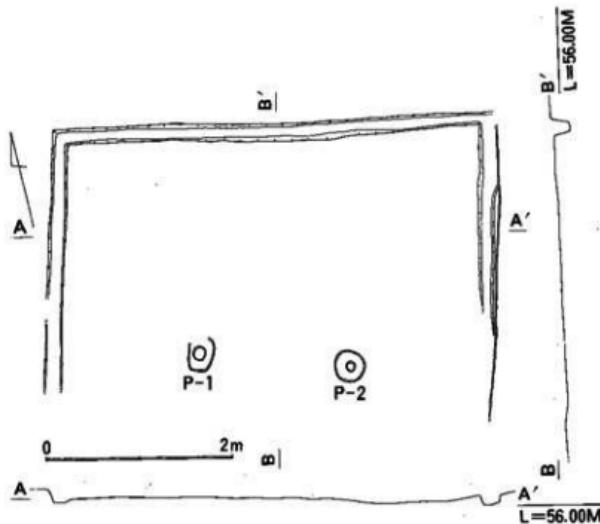


図6 SI-02実測図

壁周溝は北辺で幅20cm、深さ13.7cm、東辺で幅20cm、深さ11.8cm、西辺で幅18cmを計る。柱穴の数値は次のとおりである。

P-1 (30cm×40cm 柱径15cm)、P-2 (35cm×35cm 柱径12cm)

真々距離は162cmを計り、床面レベルは標高56.02mにある。

SI-03 (図7)

SI-01の北側に検出した堅穴式住居跡で、壁周溝の北辺部、北東コーナー以外はSI-01造成時に削平されていた。このほかに南東コーナー及び4基の支柱穴をSI-01の床面レベルで検出した。規模は南北483cm、東西規模は東壁周溝と柱穴間の距離を折り返して復元すると565cmとなる。平面プランは長方形となり、主軸はN-3°-Eにある。壁周溝は北辺で幅20cm、深さ19.6cm、東辺で幅25cm、深さ23.4cmを計る。柱穴の数値は次のとおりである。

P-1 (38cm×42cm 柱径13cm)、P-2 (50cm×48cm 柱径14cm)

P-1 (47cm×49cm 柱径14cm)、P-2 (41cm×48cm 柱径10cm)

真々距離はP-1～P-2～P-3～P-4～P-1が262cm、268cm、246cm、260cmとなる。床面レベルは標高56.25mにある。

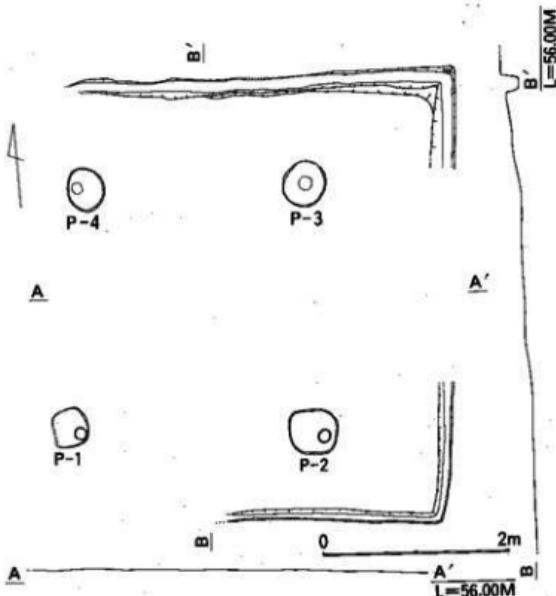


図7 SI-03実測図

SI-04 (図8)

SI-01の壁周溝北辺に沿って検出した隅丸方形の堅穴式住居跡で、壁周溝の北辺、西辺の一部及び2基の支柱穴を検出した。規模は東西490cm、南北規模は北壁周溝と柱穴間の距離を折り返して復元すると530cmとなる。平面プランはほぼ方形と考えてよい。主軸はN-23°50' -Eにある。壁周溝は北辺で幅約18~20cm、深さ約10cmを計る。柱穴の数値は次のとおりである。

P-1 (60cm×48cm 柱径16cm)、P-2 (55cm×50cm 柱径13cm)

真々距離は278cmとなる。床面レベルは標高56.10mにある。

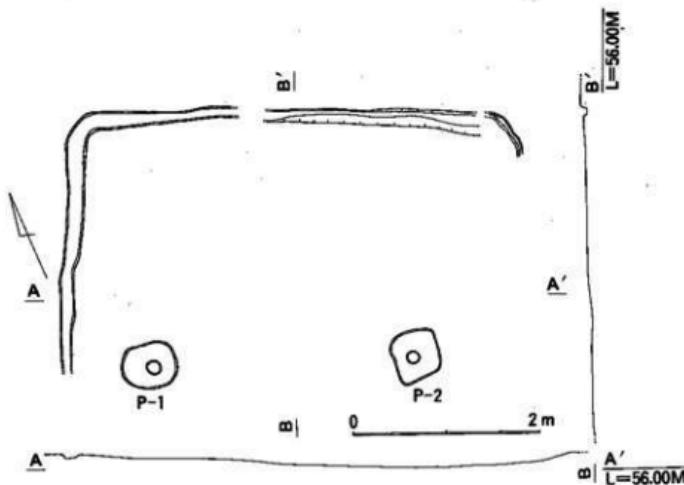


図8 SI-04実測図

SI-05 (図9)

SI-01の北壁周溝に沿って検出した堅穴式住居跡で壁周溝の北辺の一部と4基の支柱穴を検出した。規模は壁周溝と柱穴間の距離を折り返して復元すると東西402cm、南北396cmとなり、平面プランは方形と考えられる。主軸はN-14° -Eにある。壁周溝は幅15cm、深さ6cm程残る。柱穴の数値は次のとおりである。

P-1 (48cm×52cm 柱径13cm)、P-2 (47cm×48cm 東に柱抜取穴)

P-3 (52cm×56cm 柱径16cm)、P-4 (49cm×47cm 柱径13cm)

真々距離はP-1～P-2～P-3～P-4～P-1が、それぞれ265、306cm、270cm、267cmとなる。床面レベルは標高56.02mにある。

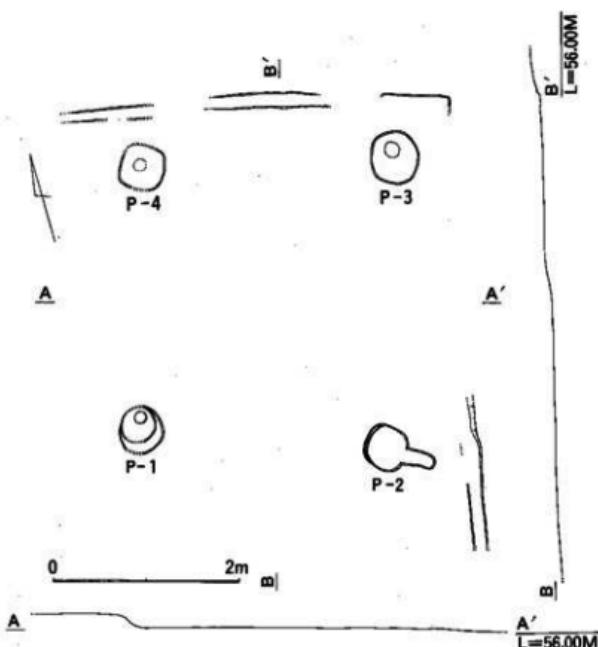


図9 SI-05実測図

SD-01

第2トレンチの東、SI-01の東側で検出した溝で幅50cm、深さ30cmを計り断面U字形を呈する。埋土は黒灰褐色粘質土（12層）で奈良時代前半の瓦、土師器、須恵器が多量に出土した。SI-01と同時併存と考えられ、SI-01の廃絶時の時期が与えられる。

SD-02

第3トレンチから第2トレンチにかけ検出した溝で東西に蛇行しながら南流する。幅20～30cmで深さは10～20cm程で断面U字形を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土（13層）である。

3. 遺物（図10、11）

図10は堅穴式住居床面ないし埋土から出土した遺物を図示した。全て須恵器で1は、SI-01の埋土とSI-05の壁溝から出土した接合資料で口径13.4cm、器高3.75cmを計る。天井部のヘラケズリも形骸化している。2は、SI-01の埋土から出土した資料で口径16.4cm、器高3.7cmを計る。口縁内部には沈線が一条めぐる。3の蓋は口径11.1cm、残存高2.7センチで身受けのかえりを持つ。天井

部には櫛による列点文を施している。蓋頂部に乳頭状もしくは宝珠形のつまみがつくものと考えられる。4はSI-01の床面に接して出土した偏平なつまみで杯Bに分類される杯蓋に接合すると考えられる。

1、3がTK-217、2がTK-43に該当すると考えられ、各々7世紀初頭及び6世紀後半の時期が考えられる。^(注1)

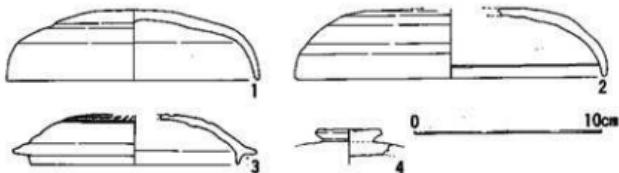


図10 堅穴式住居跡出土遺物実測図

図11に図示した土器は、堅穴式住居が営まれた東に南北走する溝から出土した遺物である。1～5、10が須恵器、6～9、11、12は土師器である。1は須恵器杯の蓋で口径21.6cm、器高2.9cmで天井部に偏平な宝珠つまみをつける。口縁端部は丸く納める。体部内外面はヘラケズリの後に横ナデによって仕上げる。2も杯蓋のつまみである。3は杯身で口径9cm、器高3.1cmで体部外面はヘラ削り、内部は3.7cmで底部に高台を持つ。内外面共に横ナデで仕上げる。5も杯身で口径14.9cm、器高4.7cmで底部に高台を持ち、内外面共に横ナデで仕上げる。平城III式の杯B IIIに分類されるものと考えている。6は土師器の杯で口径11.8cm、器高3.4cmあるが磨滅が激しく調整は不明。7も杯で口径16.9cm、器高4.7cmで口縁部をやや外反させる。やはり磨滅が激しいが一部へラミガキが認められる。平城II式の杯A IIに該当すると思われる。8は口径12.2cm、器高3.9cm、調整は不明、9は口径16.5cm、器高4.4cm、口縁端部外反させる碗である。10の須恵器甕は、口径21.2cmで小型品であり、口縁端部を丸く納める。外部には平行叩き、内部には同心円文叩板の跡がある。11の甕は口径28.4cmを計る。口縁部は外反しながら端部をつまみ上げる。端部外面には面を持つ。12も広口の甕で口径28.4cm、頸部は明確な稜を持たず、口縁部は面を残す。

以上SD-01出土土器は概ね平城II式・III式で奈良時代前半と考えられる。^(注2)

註1. 田辺昭三「陶邑古窯址群」平安学園 1966年

註2. 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅶ」1976年

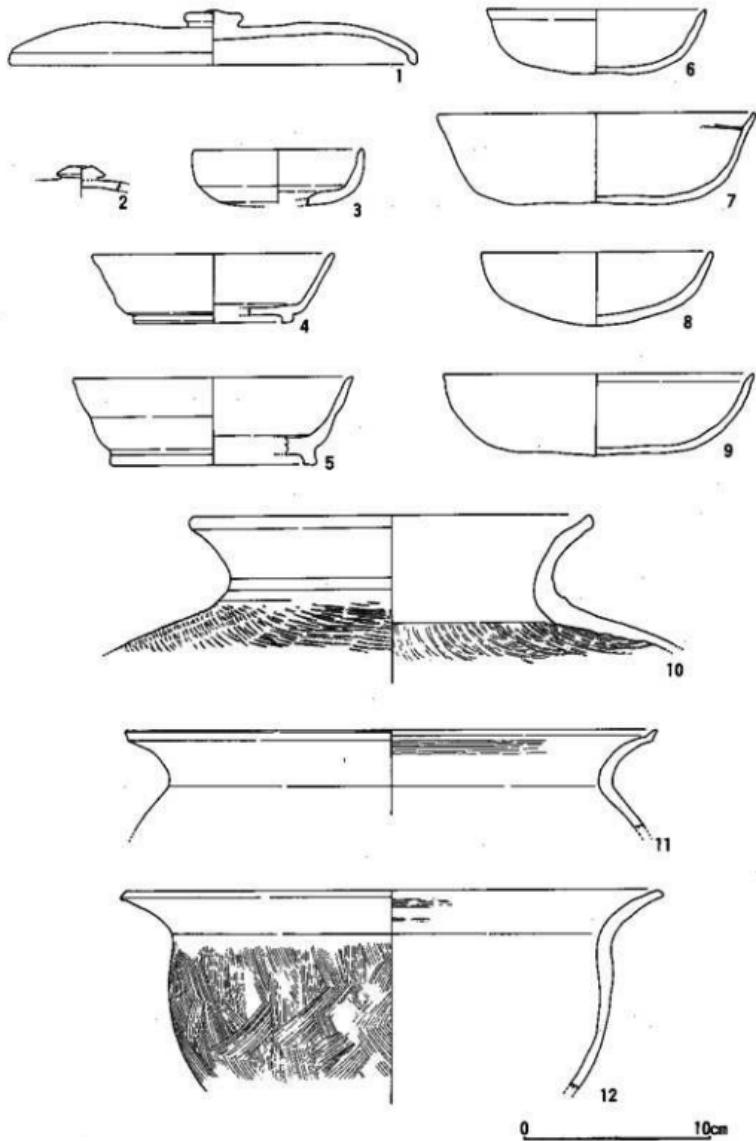


図11 SD-01出土遺物実測図

IV 結 語

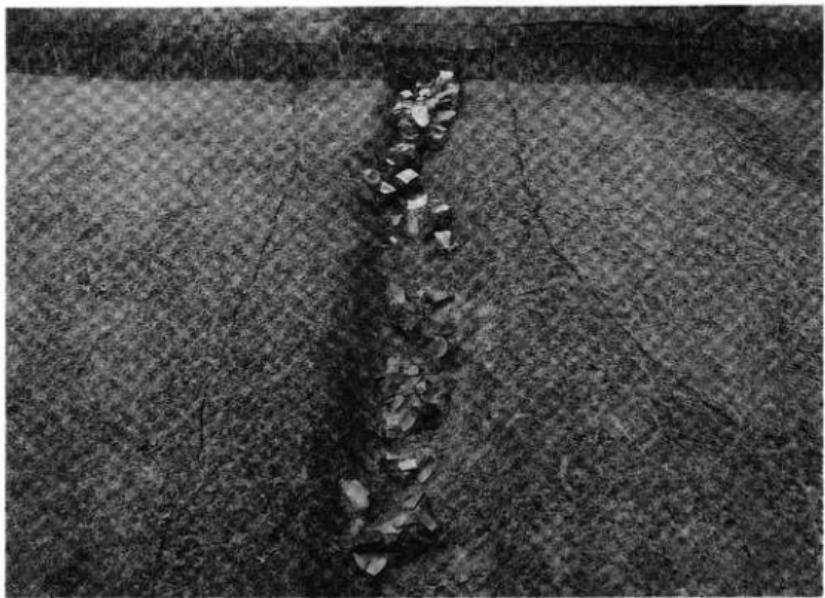
調査成果を箇条書きにして結語に換えたい。

- 1 旧地形は小字の示すとおり近世以前に東西に細長い溜池が造られ、南に堤を界して東西方向の畠、水田が営まれていた。堅穴式住居跡及び溝は北部の遺構の遺存状態が良好であることから、事業地の南東部に「地下げ」等による削平がなされていたことがわかる。調査トレント西部の暗渠は掘削層が異なるため、時期的差であるのかもしれない。上部に存在した「金池」からの排水溝でレベル差があることから池の上槽と下槽の可能性もある。
 - 2 住居跡は全部で5棟分検出した。床面積は復元規模でそれぞれSI-01=32.12m²、SI-02=23.28m²、SI-03=27.29m²、SI-04=25.97m²、SI-05=15.92m²を計測し、主柱穴はSI-01が6、SI-03,05が4、SI-02,04が2以上であった。SI-01が最後の住居跡で最も規模が大きい。各住居跡は単独で同一箇所に建て直しを繰り返し、南面に位置する西から東に延びる狹小な谷を生産手段として累世的に居住したと考えられる。遺構の切り合い・関係からSI-05→SI-04→SI-03→SI-02→SI-01の構築順位が考えられる。
 - 3 各住居跡の床面に接して出土する良好な時期決定資料を欠くが、SD-01と接合する資料がSI-01に存在することから、同時併存とみなし、SI-01は奈良時代前半の時期が考えられる。時期の確定は詳細な整理を待たねばならないが、齋舎を恐れずに推測すれば、SI-02は藤原京期に、SI-05は6世紀後半と考えられ、従って、SI-04は7世紀初頭、SI-03は7世紀中葉という時期が与えられる。
 - 4 小規模な調査でこの住居跡の性格付けを行うことは大変困難である。現段階では考えられる性格について可能性を指摘するに留めておきたい。
 - (i)周辺の同時代遺跡と関連して考えれば、北々東方向2kmに押坂彦人大兄皇子の成相墓とされる牧野古墳が所在する。「延喜諸陵式」に掲れば、兆域は東西15町・南北20町で守戸が5烟と記載されている。調査地点が位置的に盆地から丘陵内部に続く道程にあり、堅穴式住居跡が牧野古墳の兆域の南西を衛する守戸であった可能性を否定はできない。
 - (ii)後背する位置にある天照皇大神神社は由緒不明であるが、南側の丘陵上には式内社と考えられている穗雷神社がある。社殿が該期に遡るか否かは不明であるが、何らかの係わりがあったのかもしれない。
- いずれにしても、この地点を移動することなく累世的に居住した住居跡に政治的な背景を考慮しておきたい。

図 版



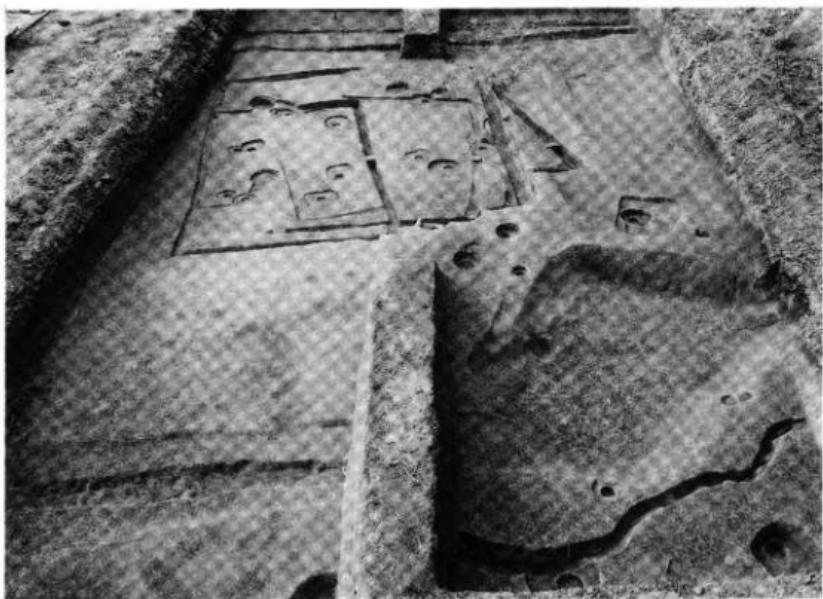
第1 トレンチ全景（南から）



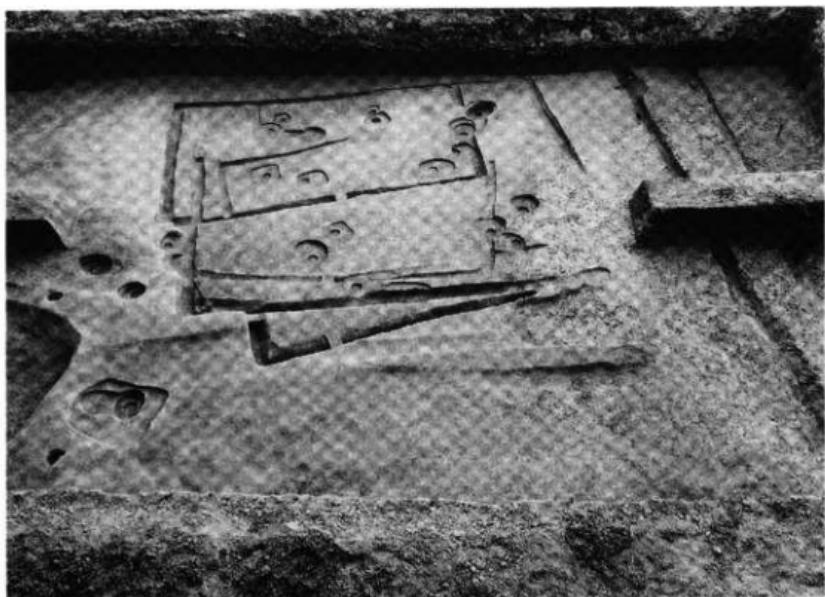
第2 トレンチSD-01遺物出土状況（南から）



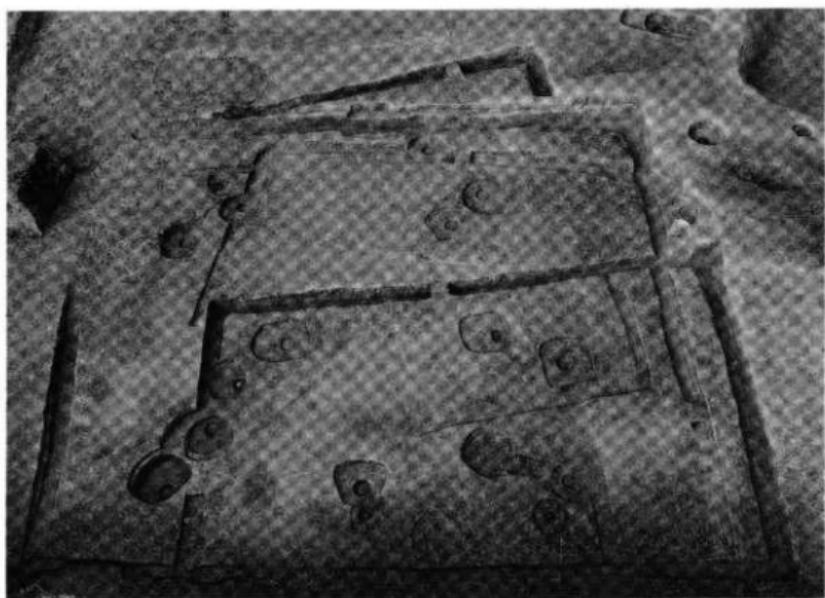
第2・3トレンチ全景（西から）



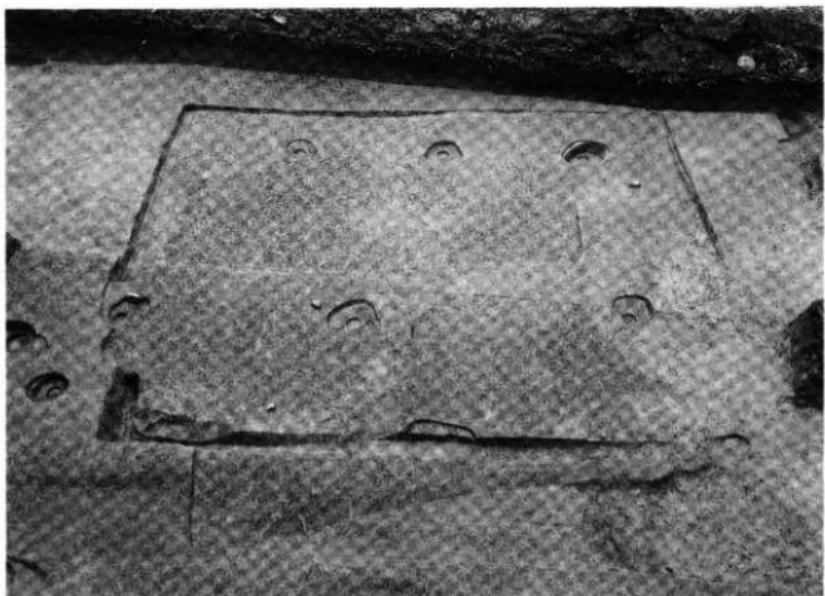
第2・3トレンチ全景（東から）



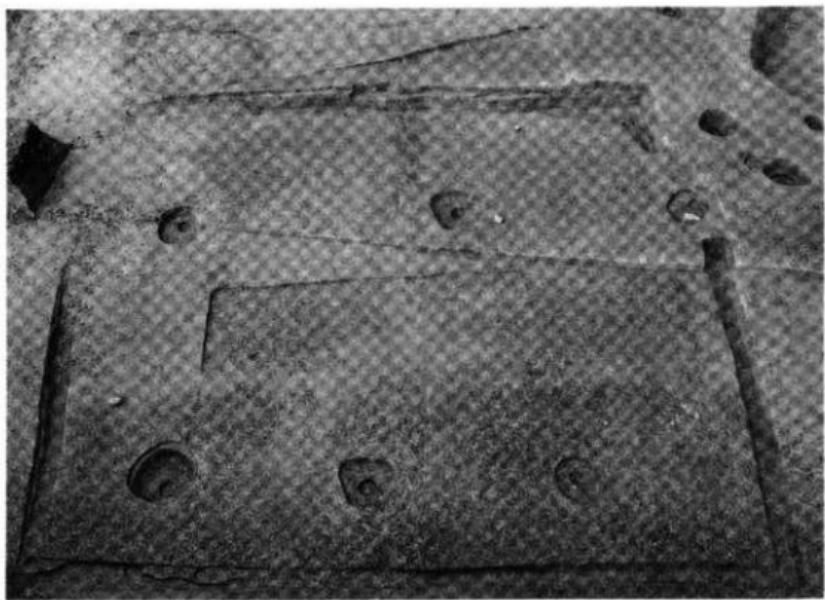
第2・3 トレンチ堅穴式住居跡群全景（北から）



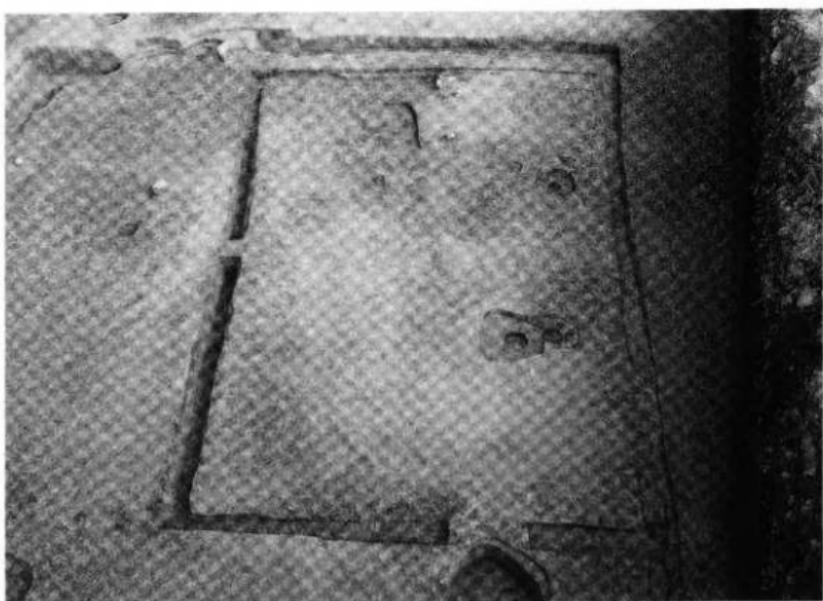
第2・3 トレンチ堅穴式住居跡群全景（南から）



SI-01全景（北から）



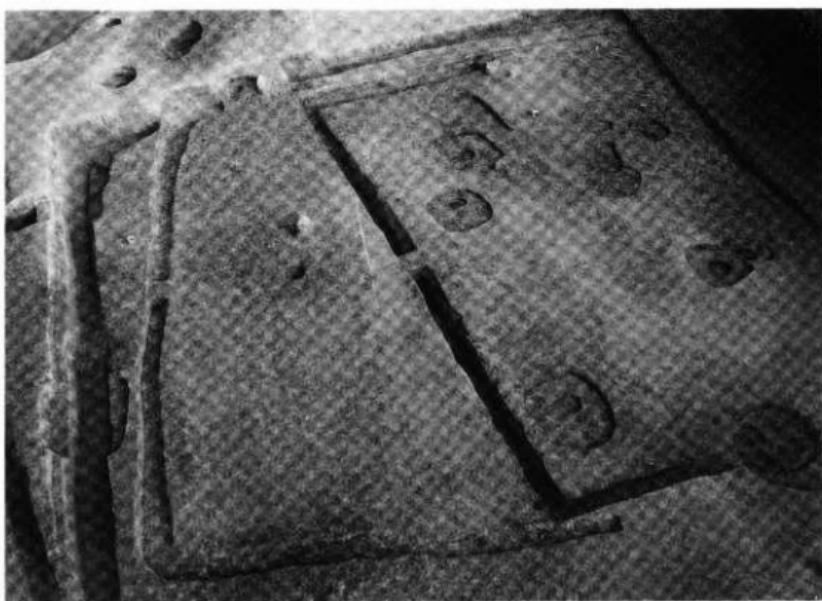
SI-01全景（南から）



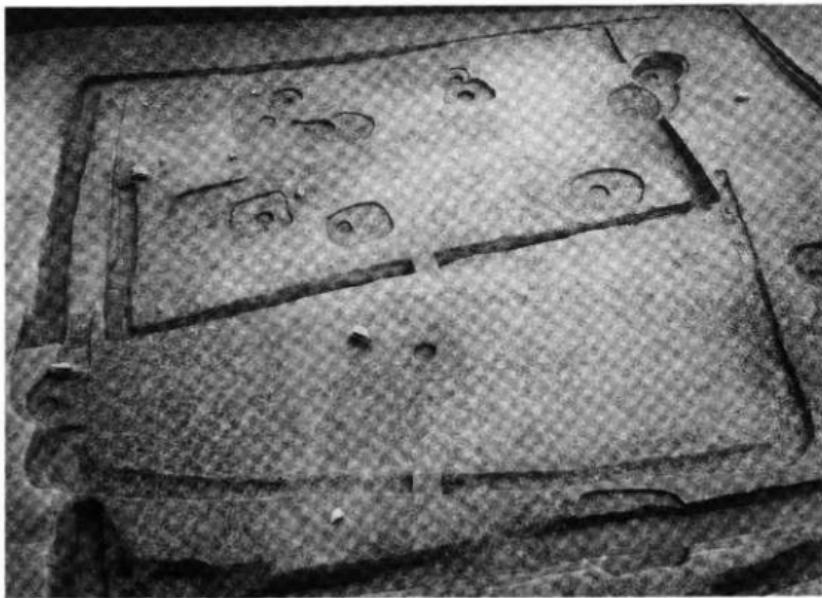
SI-02全景（西から）



SI-02全景（北から）



SI-04全景（西から）



SI-04全景（北から）

広陵町埋蔵文化財調査概報 5

平尾金池遺跡発掘調査概報

発行日 平成5年3月31日

発 行 広陵町教育委員会

印 刷 橋本印刷株式会社